

(実践報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	在宅専門医の病棟配属による在宅患者の入院事情の変化
演者名	下地 直紀
所属	長町病院

【目的】宮城厚生協会长町病院（以下、当院）は仙台市太白区に位置する全 135 床の中小病院である。2011 年～在宅療養支援病院として、約 75 名の患者の訪問診療を行っている。訪問診療は内科所属医師 4 名（在宅医学会研修プログラム経験医師 1 名、実践者コース経験医師 1 名の合計 2 名を含む）で担当している。有床であるが故、有事の際は入院を希望される家族が全体の 90%以上を占める中、長期入院による廃用や在院日数延長による経営面での問題に悩まされてきた。2014 年 3 月からの新病院開設をきっかけに、2014 年 1 月～1 名、4 月から 2 名の在宅経験医師の配属（両者とも 2014 年 6 月に在宅医学会専門医取得）となった。在宅専門医の病棟配属前後で、在宅患者の入院事情がどのように変化したかを調査した。

【方法】 2010 年 1 月～2014 年 8 月の間に、当院在宅患者の入院の契機となった疾患名、入院総数、予後、入院日数についてまとめた。

【結果】入院患者の疾患名は肺炎や尿路感染を中心に配属前後で著変を認めなかった。入院総数は、配属前が年間あたり 60～70 名前後であったのに対し、2014 年度は 8 月の時点ですでに約 50 件で、年間数に換算すると増加の傾向を認めた。一方で、在院日数は配属前が平均 35～45 日であったのに対し、2014 年度は 17.8 日と大幅短縮を示した。在宅復帰率も専門医配属後は 85%と高水準を記録した。入院日数と在宅復帰率については、特に肺炎について大きな向上を示した。

【考察】在院日数の短縮と自宅復帰率向上の背景には、①患者の普段の状態や生活を熟知した在宅医師が、入院早期から自宅退院を目標として、治療・廃用防止目的のリハビリを依頼したり、他職種・家族との面談や情報交換を日常的に行っていること、②リハビリスタッフが豊富なこと、③中小病院であるが故、各職種が顔の見える関係にあること、④入院を担当した医師が退院後早期に初回の訪問診療を行っていること、などが考えられる。